

効率的な検査室運用を目指した業務の可視化・数値化による効果

◎岡野 正道¹⁾、米川 伸生¹⁾、鈴木 映美¹⁾、武藤 圭一¹⁾、宮田 忠明¹⁾、檜山 文彦¹⁾、川崎 智章¹⁾
社会福祉法人 恩賜財団済生会支部 茨城県済生会 水戸済生会総合病院¹⁾

【背景】 当院では、院内検査に加え、採血室業務と一般健診検査を臨床検査科にて担っており、業務効率化を図るうえで、採血室から検体検査室での検体運搬など検査前工程における運用面や構造面での課題を抱えている。今回、人の動きを可視化する動線データや Turn Around Time (以下、TAT) データを用いた分析による現状運用の俯瞰した評価を行うことで、効率性に重点を置いたレイアウト変更や業務の最適化に向けた取り組みを行ったので報告する。

【方法】 2021年9月6日から9月19日の2週間でのルーチンや日当直を含む採血室と検体検査室のTATデータ、動線データから現状業務の可視化、数値化を行った。

【結果】 TATデータより、検体全体の60%以上は8時～10時台に集中しており、午前中の早い時間帯に提出されることから、特に外来検体における迅速な結果返信が必要である。その中で、遠心などの測定前工程や再検検体のピックアップ工程における時間延長が課題となった。

また、動線データから構造面での課題が明瞭となり、特に生化学・免疫検査室では遠心機や単独運用の各分析装置間

などの動線が頻回かつ煩雑となっていた。

更に、検査室の各部門が壁で仕切られており、検体運搬の距離が長いことや、他部門との連携不足が生じていることが検査室運営での大きな課題と判断し、それらの解決に向け、新レイアウトと最適な分析装置構成が必要であった。

【考察】 各人が感覚的に捉えていた課題をデータとして可視化・数値化することが、検査室運用を俯瞰的に捉え課題解決に向けて重要であった。これらの分析により検査業務の最適化・効率化を図り、構造上の問題点を解決することで迅速TATによる外来診療への貢献につながると考えた。生化学自動分析装置の更新に伴い、壁の撤去など測定前工程の効率性に重点を置いた新たなレイアウト配置での検査運営を行っていく。これにより検査室内の運用効率化にとどまるだけでなく、タスク・シフト/シェアなどによる病院や他診療部門などへの更なる貢献を行っていくことが重要である。

(連絡先:029-254-5151)